

日本語からの借用語の性 — フランス語とイタリア語の場合 —  
Genre des mots empruntés au japonais en français et en italien

舟 杉 真 一

Shinichi FUNASUGI

1. はじめに

名詞に「性」を区別している言語では、新しい語が生み出されたり、他の言語から語が借用された場合には、それが名詞である限り「性」を与える必要に迫られる。その際、どの「性」を与えるかを決定する要因は何なのか。また、ロマンス諸語内では、その決定要因に違いが見られるのか。本稿では、フランス語とイタリア語を対象に、名詞に「性」という区分を持たない日本語からの借用語がどのような「性」を与えられているのかについて分析してみたいと思う。

2. 資料

今回の発表で対象とした借用語は、原則として日本語がそのままの形で借用されているもので、蒐集に利用した資料は次の通りである。

2. 1 フランス語資料 [文学作品はすべて日本語からの直接訳]

- 1) ABÉ KÔBÔ, LA FEMME DES SABLES, Le livre de poche 1993 (『砂の女』)
- 2) AKUTAGAWA Ryūnosuke, LA VIE D'UN IDIOT ET AUTRES NOUVELLES, Gallimard 1987 (『或阿呆の一生、他』)
- 3) Clarisse DESILES, PRINTEMPS EN HOKKAIDO — à la rencontre du Japon I —, 朝日出版社 1984
- 4) Clarisse DESILES, AUTOMNE À KYUSHU — à la rencontre du Japon II —, 朝日出版社 1984
- 5) Clarisse DESILES, FASCINANTE NAGASAKI — à la rencontre du Japon III —, 朝日出版社 1985
- 6) CONTES D'ISE, Gallimard 1988 (『伊勢物語』)
- 7) DAZAI Ōsamu, LA DÉCHÉANCE D'UN HOMME, Gallimard 1990 (『人間失格』)
- 8) FUKAZAWA Shichirō, NARAYAMA, Gallimard 1989 (『楢山節考』)
- 9) Francine HERAIL, HISTOIRE DU JAPON, Horvath 1990
- 10) INOUÉ Yasushi, LE FUSIL DE CHASSE, Le livre de poche 1993 (『猟銃』)
- 11) JAPON, Hachette guides bleus 1989
- 12) KAWABATA Yasunari, CHRONIQUE D'ASAKUSA, Le livre de poche 1992 (『浅草紅団』)
- 13) KAWABATA Yasunari, KYOTO, Le livre de poche 1989 (『古都』)
- 14) KAWABATA Yasunari, LA DANSEUSE D'IZU, Le livre de poche 1989 (『伊豆の踊り子』)
- 15) KAWABATA Yasunari, LE GRONDEMENT DE LA MONTAGNE, Le livre de poche 1989 (『山の音』)
- 16) KAWABATA Yasunari, LE LAC, Le livre de poche 1987 (『みずうみ』)
- 17) KAWABATA Yasunari, LE

MAÎTRE OU LE TOURNOI DE GO, Le livre de poche 1989 (『名人』) 18) KAWABATA Yasunari, LES BELLES ENDORMIES, Le livre de poche 1989 (『眠れる美女』) 19) KAWABATA Yasunari, PAYS DE NEIGE, Le livre de poche 1987 (『雪国』) 20) コンコルド和仏辞典, 白水社 1990 21) L'ÉCHO DE LA FRANCE, 飛鳥洞 22) LE FIGARO 23) LE JAPONAIS SANS PEINE Tome1, Assimil 1988 24) Maurice MOREAU, LE JAPON D'AUJOURD'HUI, 三修社 1980 25) MISHIMA Yukio, LE PAVILLON D'OR, Gallimard 1989 (『金閣寺』) 26) MISHIMA Yukio, LES AMOURS INTERDITES, Gallimard 1989 (『禁色』) 27) MORI Ogai, VITA SEXUALIS, Gallimard 1988 (『キタ・セクスアリス』) 28) NAGAI Kafû, LE SECRET DE LA PETITE CHAMBRE, Philippe Picquier 1994 (『四畳半襖の下張り』) 29) NATSUME Sôseki, SANSHIRÔ, Philippe Picquier 1990 (『三四郎』) 30) 日本絵とき事典 11, 日本交通公社 1988 31) 日本絵とき事典 12, 日本交通公社 1989 32) RAKUGO, 白水社 1996 33) Jean-François SABOURET, L'ETAT DU JAPON, La découverte 1988 34) SAKAGUCHI Ango, L'IDIOTE, Philippe Picquier 1990 (『白痴』) 35) SEI Shônagon, NOTES DE CHEVET, Gallimard, 1993 (『枕草子』) 36) SHIGA Naoya, LE SÉJOUR À KINOSAKI, Arfuyen 1986 (『城の崎にて』) 37) SUZUKI Akio, UN JAPONAIS À PARIS, Belfond 1988 38) TANIZAKI Junichro, JOURNAL D'UN VIEUX FOU, Gallimard 1988 (『瘋癲老人日記』) 39) TANIZAKI Junichro, LA CONFESION IMPUDIQUE, Gallimard 1988 (『鍵』) 40) TANIZAKI Junichro, SVASTIKA, Gallimard 1988 (『卍』) 41) URABE Kenkô, LES HEURES OISIVES, Gallimard 1987 (『徒然草』) 42) YANAGITA Kunio, CONTES DU JAPON D'AUTREFOIS, Publications orientalistes de France 1983 43) YOKOMIZO Seishi, LA HACHE, LE KOTO ET LE CHRYSANTHÈME, Gallimard 1988 (『犬神家の一族』) 44) YOSHIMOTO Banana, KITCHEN, Gallimard 1994 (『キッチン』) 45) YOSHIYUKI Junnosuke, LA CHAMBRE NOIRE, Philippe Picquier 1990 (『暗室』)

## 2. 2 イタリア語資料

古浦敏生、「イタリア語における日本語からの借用語 —その性(genere)をめぐって—」

『広島大学文学部紀要第 49 巻特輯号 2』, 1990

## 3. 日本語からの借用語と性との関係

まず、フランス語・イタリア語のそれぞれにおける日本語からの借用語と性との関係を見てみると次のようになる。

表 1	総数	男性	女性	男女	傾向
フランス語	1660	1361	292	7	82% 男性傾向
イタリア語	722	606	89	27	84% 男性傾向

どちらの言語も圧倒的に男性名詞となる傾向が強くなっている。この傾向は、フランス語の

場合、舟杉 (1987) で明らかにしたように、他の言語からの借用語にも同様に見られる現象である。

4. フランス語とイタリア語に共通の日本語

表1のうち、フランス語とイタリア語に共通した日本語は299語で、性との関係は表2のようになる。

表2

フランス語	男性	女性	男性	女性	男女	男女	男性	女性	男女
イタリア語	男性	女性	女性	男性	男性	女性	男女	男女	男女
件数	232	9	21	8	9	1	15	3	1

フランス語・イタリア語ともに男性となっている場合が232語と最も多く、共通語全体の77.6%を占めている。男性傾向となるのは先ほどの各言語の全体傾向と同様であるが、興味深いのは、このような強い男性傾向の中で、あえて女性名詞となっているもの、また、フランス語とイタリア語において性が異なっているものである。以下は、それらについて具体的に見てみることにする。

4. 1. 両言語ともに女性名詞となっている語

両言語ともに女性名詞となっているのは、次に太字で示した9語である。フランス語とイタリア語で正書法が多少異なる場合もあるが、大部分は同様の綴りとなっているので、用例は日本語で示した。

4. 1. 1. 自然の性に従って女性名詞となっている語 6語

優婆夷 花魁 芸者 白拍子 比丘尼 弁財天

これらの共通の借用語だけではなく、それぞれの言語における自然の性に関わる借用語は、例外なく自然の性に従った文法上の性となっている。自然の性の影響は文法上の性の決定に大きな影響力を持っていると言える。

4. 1. 2. その他 3語

自然の性を持たないもので女性名詞となっているのは、**NHK**、**同盟**、**(相撲) 部屋**の3語である。性決定要因として一般的に考え得るのは、翻訳された場合に相当する語の性、意味のまとまりとしての性傾向、語尾形態等だと思われる。この3語について、それぞれの関連語、および、意味のまとまりと性との関係を示してみると次のようになる。

① **NHK** フランス語 ← 協会 *société f. association f. fondation f.*

イタリア語 ← 協会 *società f. associazione f. istituto m.*

☆ ~協会：フランス語「日本空手協会」「能楽協会」→ 男性名詞

企業名：フランス語「NTV」「JAL」「東京佐川急便」「日本アジア航空 (Japan Asia Airways)」

「日本航空 (Japan Airlines)」 「日本鋼鉄株式会社」 → 女性名詞

イタリア語「東洋工業」「三井」「三菱」 → 女性名詞

「三越」 → 男性名詞

関連語は女性名詞が多いことがわかる。また、意味のまとまりとしての傾向では、フランス語の場

合、同じ「～協会」であっても、「日本空手協会」「能楽協会」などは男性名詞となっているが、「企業名」に関しては、イタリア語の「三越」を除き、両言語とも女性名詞となっている。イタリア語の「三越」は百貨店の意の男性名詞 *grande magazzino* の影響によるものと考えられる。

②同盟 フランス語 ← 同盟 *confédération f. alliance f. coalition f. ligue f.*

イタリア語 ← 同盟 *confederazione f. lega f. alleanza f. coalizione f.*

関連語はすべて女性名詞である。

③(相撲)部屋 フランス語 ← 部屋 *chambre f. pièce f. salle f.*

イタリア語 ← 部屋 *camera f. stanza f. sala f.*

関連語はすべて女性名詞である。語尾形態については、イタリア語の場合の語末母音字の a の影響はどうであろうか。周知の通り、イタリア語の場合、-o に終わる語は男性、-a に終わる語は女性となる一般的な傾向があるが、それらの語尾の影響、また、それぞれの複数語尾としての -i、-e などの影響は、外来語の性決定にも影響力を持っているのであろうか。今回対象としたイタリア語のすべての語について、これらの語末文字と性との関係をまとめてみたのが表 3 である。男性・女性のどちらにもなりうるものとして扱ったのは、語形態が全く同じ場合のみで、形態が異なるものは、男性、あるいは、女性として扱った。

表 3

語尾	総数	男性	女性	男女	傾向
-o	85	75	8	2	88.2% 男性
-a	115	70	21	24	60.9% 男性
-i	233	201	20	12	86.3% 男性
-e	49	44	3	2	89.8% 男性

全体の割合として男性名詞が多いため  
の必然的な結果にとどまり、少なくとも  
外来語の性決定要因としての影響力は認  
めにくいと思われる。

#### 4. 2. 性が逆転している語

フランス語とイタリア語で性が逆になっているのは、性が揺れているものを除き、29 語である。それぞれの言語内での意味のまとまりと性傾向との関係、および、両言語で共通の語を太字にして具体的にまとめてみることにする。

##### 4. 2. 1. フランス語：男性    イタリア語：女性

フランス語で男性、イタリア語で女性となっているのは 21 語である。

① 文芸に関する語：フランス語総数 19 [100%男性]    イタリア語総数 32 [62.5%男性]

掛詞    狂歌    新体詩    短歌    枕詞    連歌

掛詞などの文芸に関する語は、イタリア語の場合にははっきりとした性傾向は見られないが、フランス語の場合には共通語以外のものも含め 19 件あり、すべて男性名詞となっている。イタリア語の場合に、女性となる理由としては、ことばに相当する *parola*、詩に相当する *poesia* などが女性名詞であることが考えられるが、全体傾向としては男性となる場合の方がわずかに多く、借用者の判断にゆ

だねられているようである。

- ② 芸能に関する語：フランス語総数 40 [100%男性] イタリア語総数 32 [75%男性]

長唄 漫才

長唄や漫才などの芸能に関する語についてもフランス語の場合には 100%の男性傾向が見られるに  
対し、イタリア語の場合には 75%の男性傾向である。イタリア語において女性名詞となっている理由  
としては、 *canzone, scenetta comica* などの女性名詞の影響が考えられる。

- ③ 都市名：フランス語総数 4 [75 %男性] イタリア語総数 2 [100%女性]

京都 東京

都市名に関しては、両言語とも都市に相当する語 (*ville, città*) が女性名詞であることを考えれば、  
イタリア語のように女性扱いとなることが考えられるが、フランス語の場合には、むしろ男性傾向が  
見られる。女性名詞となっている都市名は鹿児島 1 語で、都市に相当する *ville* が女性名詞である影  
響か、あるいは、借用者が鹿児島を島と勘違いし、島に相当する *île* が女性名詞のために鹿児島のみ  
を女性名詞としたのかもしれない。都市名以外の地名・地方名に関する語はすべて男性となっている。

- ④ 地域・界限：フランス語総数 5 [100 %男性] イタリア語総数 5 [男性 2 女性 1 男女 2]

新京極

「地域・界限」に相当する語としてはフランス語の男性名詞 *quartier*、イタリア語の男性名詞 *quartiere*  
が考えられるが、イタリア語で女性名詞となっている理由としては、古浦(1992)では、翻訳者が女性  
名詞 *zona* と判断したためではないかとしている。

- ⑤ その他の地名関係 琉球

イタリア語で女性となっている理由としては、「島」の意の女性名詞 *isola* の影響が考えられる。

- ⑥ 道路名：フランス語総数 18 [72.2 %男性] イタリア語総数 2 [100%女性]

東海道 花道

フランス語で女性となっている 5 例はすべて「～ライン」(大山高原ライン、乗鞍スカイライン、etc)  
で、女性名詞 *ligne* の影響と考えられる。イタリア語で女性となる理由としては、女性名詞 *strada, via*  
の影響が考えられる。ただし「花道」に相当する語としては男性名詞の *passaggio* も考えられなくは  
ない。

- ⑦ 建築物：フランス語総数 56 [91.1 %男性] イタリア語総数 27 [85.2%男性]

西院, 東院 (建築物)

フランス語で少数派の女性名詞となっているのは、東大門、町屋、民家、マンションで、  
東大門については、「門」の意の女性名詞 *porte* の影響が考えられるが、山門は男性名詞の場合と女性  
名詞の場合の両方が見られる。町屋、民家については「家」の意の女性名詞 *maison* の影響が考えら  
れる。マンションについては語尾発音の影響が考えられる。

イタリア語で女性となっているのは、太字の語以外に（日比谷）公会堂、南門、陽明門の3語で、門に関わる語の場合は、フランス語と同じように女性名詞 *porta* の影響が考えられるが、「南大門」については男性となる場合と女性となる場合がある。

建築物に関連して、「神社仏閣名」と性との関係をまとめると次のようになる。

神社仏閣名：フランス語総数 168 [100%男性] イタリア語総数 54 [98.1%男性]

フランス語については例外なく男性名詞となっている。また、イタリア語の場合も、三十三間堂が男性女性のどちらにもなりうる以外は男性名詞となっている。

公会堂、西院、東院などについてははっきりとした根拠が見あたらないが、西院や東院などの場合は、独立した神社仏閣と見なした場合には男性名詞に、神社仏閣内の一建築物と見なした場合には女性名詞となる場合もみられる。

⑧ 髪型：フランス語総数 8 [75%男性] イタリア語総数 2 [50%]

#### 島田

髪型については、イタリア語では2例しかなく性傾向がはっきりしないが、フランス語では7件見られ、5件は男性、「揚巻(アゲマキ)」のみが女性で、興味深いのは「银杏(イチョウ)返し」が日本語からの直接借用の場合には男性であるのに対し、*ginkgogaeshi* という仏和折衷型の場合には女性となっていることである。髪型に相当するフランス語 *coiffure* が女性名詞であることが、借用者に影響を及ぼしたのかもしれない。

イタリア語で男性名詞となっているのは「髷」で、「髷」に相当するイタリア語としては女性名詞 *crocchia*、男性名詞 *chignon* が考えられる。また、「髪型」に相当する語としては女性名詞 *pettinatura*、*capigliatura* が考えられる。

⑨ 乗り物：フランス語総数 9 [88.9%男性] イタリア語総数 4 [50%男性：男性2 女性1 男女1]

#### 新幹線

フランス語で女性となっている唯一の語は「Honda250」で「オートバイ」に相当する女性名詞 *moto* の影響と考えられる。

イタリア語において、「新幹線」が女性となっている理由としては「路線、線路」の意である女性名詞 *linea* の影響が考えられる。

⑩ 行事・祭り：フランス語総数 9 [77.8%男性] イタリア語総数 8 [62.5%男性]

#### 雛祭り

雛祭りに関しては、両言語とも「祭り」に相当する語 *fête*、*fiesta* が女性名詞であることを考えれば、女性扱いとなることが考えられるが、両言語ともにはっきりとした性傾向は見られない。

⑪ その他

こけし イタリア語で女性となっている理由としては、「人形」の意の女性名詞 *bambola* の影響

が考えられる。

茶筌 イタリア語で女性となっている理由としてし、「泡立て器」の意の女性名詞 *frusta* の影響が考えられる。<sup>1)</sup>

#### 4. 2. 2. フランス語：女性 イタリア語：男性

フランス語で女性、イタリア語で男性となっているのは 8 語である。

##### ① 河川名：フランス語総数 124 [100%女性] イタリア語総数 6 [100%男性]

桂(川) 鴨(加茂)川 球磨川 高瀬川 天竜川 保津川

日本の河川名については、フランス語の場合、舟杉(1997 b) で 122 件を蒐集したが、すべて女性名詞となっている。イタリア語の場合には共通語の 8 例のみであるがいずれも男性名詞となっている。この現象の説明としては、イタリア語の場合、「河川」に相当する語 *fiume* が男性名詞であることがあげられるが、フランス語の場合には、海に注ぐ *fleuve* は男性名詞、他の河川に流れ込む *rivière* が女性名詞となっているが、このような上位語の意味に関係なく、日本語の河川名はすべて女性となっている。

##### ② 山の名：フランス語総数 188 [72.9%男性] 「～岳」総数 34 [53%女性]

イタリア語総数 17 [94.1%男性]

#### 中岳

日本の山の名については、フランス語の場合、舟杉(1997 b) で 188 件を蒐集したが、全体的には 72.9 %の男性傾向があるが、「～岳」の場合(53 %)と「～山」の場合(52 %)だけがわずかに女性傾向が見られる。山に相当する語はフランス語もイタリア語も男性名詞の *mont, monte* と女性名詞の *montagne, montagna* に分かれるが、個々の山には男性名詞 *mont, monte* との結びつきが強いようである。イタリア語の場合には 15 例すべて男性名詞となっている。

##### ③ その他

弥勒菩薩 フランス語の弥勒菩薩については、次のような形で出てくる。

*La merveilleuse Miroku Bosatsu qu'abrite le sanctuaire de Chûguji* (資料 11 p.120)

ここでは弥勒菩薩像の意で、彫像を意味する *statue* が女性名詞であることがここでの性決定要因と思われる。これは、観音についても同様で、フランス語の場合は女性名詞、イタリア語の場合は、男性となる場合と女性となる場合があるが、女性となっている場合には、同様に、彫像の意である女性名詞 *statua* の影響と考えられる。

#### 5. まとめ

以上、フランス語とイタリア語における日本語からの借用語の性について概観してきたが、性が同じになっていたのは共通語全体の 90.2 %とかなりの共通性が見られると言える。全体としては、男

性傾向が非常に強くなっている。取り入れる側の言語にとっては異質な音の並び、異質な正書法である外来語は、強い女性傾向がない限り、男性傾向となるのは、統辞的に男性名詞と女性名詞の混合複数の場合に、人称代名詞、形容詞等の一致が男性複数として扱われることにも関連性があると思われる。このように強い男性傾向の中で、あえて、女性名詞となる場合の要因としては、一番目に、自然の性に関わる語で、その語が「女性・雌」等を表す語の場合、二番目に、翻訳した場合に相当する語が女性名詞の場合、三番目に、女性傾向の強い意味のまともに属する語である場合等が考えられる。しかしながら、これらの要因も絶対的なものではなく、決定打に欠くような場合には、借用者の主観的判断に性決定が委ねられることになる。

### 【注】

本稿は、1998年5月の日本ロマンス語学会第36回大会（早稲田大学）で行った口頭発表に加筆・訂正をしたものである。席上、貴重な助言、質問を戴いた方々に感謝いたします。特に、古浦敏生先生には、貴重な御教示を戴いた。

1) 茶筌がイタリア語でどうして女性名詞になるかについては、執筆者は次のような例文から、「髪型」の意の女性名詞 *pettinatura* と同じ女性名詞として扱ったのではないかと考えたのであるが、古浦先生より「泡立て器」の意の女性名詞 *frusta* の影響であるという御教示戴いた。

『山の音』新潮文庫 p.202,203

「ばあさんの洗い髪はね。いっそ、切ってしまっ、茶筌にでもしたらどうだ。」

「ほんとに。でも、茶筌髪というのは、ばあさんに限らず、江戸時代に、男も女も結った髪形で、短く切って、うしろでたばねて、たばねた先を、茶筌のようにするんですよ。歌舞伎に出できません。」

IL SUONO DELLA MONTAGNA, Tascabili Bompiani p.178

“È vero. I capelli appena lavati di una donna vecchia danno una brutta impressione. Perché non li tagli e non li porti alla *chasen*?”

“Ma tu sai come si porta la *chasen*? Nel periodo Edo, non era una *pettinatura* per le vecchie. La portavano uomini e donne; li tagliavano corti e li raccoglievano dietro la testa facendo ricadere la coda che somigliava a un frullino di bambù per la cerimonia del tè. La vedi nelle scene del teatro Kabuki.”

### 【参考文献】

Dardel, R. 1965. Recherches sur le genre roman des substantifs de la troisième déclinaison. Droz

Dauzat, A. 1977. Le génie de la langue française. Librairie guénégaud, Paris

舟杉真一 1987. 「フランス語における外来語の性について」『LUTÈCE』第18号 大阪市立大学



フランス文学会

1990. 「現代フランス語における名詞の「性」(genre)について」『研究論叢』 X X X V

京都外国語大学

1993. 「現代フランス語名詞の語尾発音と「性」(genre)について」『研究論叢』 X L I

京都外国語大学

1994.a. 「固有名詞と「性」(genre) (1) - 国名, 言語名と性 -」『研究論叢』 X L II

京都外国語大学

1994.b. 「自然性 (sexe) と文法性 (genre) (1) - 人名と性 -」『研究論叢』 X L III

京都外国語大学

1995.a. 「意味と性 (genre) (1) - チーズとワインの性 -」『研究論叢』 X L IV

京都外国語大学

1995.b. 「現代フランス語名詞の語尾形態と「性」(genre)」『研究論叢』 X L V

京都外国語大学

1996.a. 「現代フランス語における基本語の「性」(genre)について」『研究論叢』 X L VI

京都外国語大学

1996.b. 「意味と性 (genre) (2) - 「果実名」と「果樹名」の性 -」『研究論叢』 X L VII

京都外国語大学

1997.a. 「現代フランス語における同形異性異意語について」『研究論叢』 X L VIII

京都外国語大学

1997.b. 「固有名詞と「性」(genre) (2) - 河川と山の性 -」『研究論叢』 X L IX

京都外国語大学

濱崎長壽 1966. 「文法上の性」『人文研究』第17巻 大阪市立大学文学部

1968. 「「文法上の性」諸問題」『人文研究』第19巻 大阪市立大学文学部

1987. 『ゲルマン語の話』大学書林

占浦敏生 1990. 「イタリア語における日本語からの借用語 - その性 (genre) をめぐって -」

『広島大学文学部紀要第49巻特輯号2』

1992. 「イタリア語・フランス語に借用された日本語名詞の性」『広島大学文学部紀要第52

巻』

Mok, Q.I.M. 1968. Contribution à l'étude des catégories morphologiques du genre et du nombre dans le français parlé actuel. Mouton

Mortureux, M.-F. 1990. L'hyponymie et l'hyperonymie. LANGAGES 98. Larousse

Pohl, J. 1973. Le gorille et l'ablette Approximations statistiques sur le genre des noms d'animaux.

Mélanges de linguistique française et de philologie et littérature médiévales. C.Klincksieck

1973. Le genre et la 《sexualisation》 de l'inanime. XVI Congresso internazionale di linguistica e filologia romanza. Gaetano Macchiaroli

Rigault, A. 1984. Les marques du genre. La grammaire du français parlé. Hachette

Roché, M. 1992. Le masculin est-il plus productif que le féminin? LANGUE FRANÇAISE 96. Larousse

島岡茂 1976. 『ロマンス語の話』 大学書林

1980. 『フランス語文法の背景』 大学書林

1986. 『ロマンス語比較文法』 大学書林

Wartburg, W. 1969. Problèmes et méthodes de la linguistique. Presses universitaires de France

Yaguello, M. 1989. Le sexe des mots. Belfond